



No.1

mi.ra.i.e

つなごう・未来へ

出版に働くものだからこそ、できること

2015年2月12日発行

編集・発行 出版労連（日本出版労働組合連合会）〒113-0033 東京都文京区本郷 4-37-18 いろは本郷ビル 2階

TEL 03-3816-2911 FAX 03-3816-2980 E-mail rouren@syuppan.net URL <http://www.syuppan.net/>

日本は住みやすいですか？



すぐそこにある暴力

関永基〔中山 永基〕（岩波書店労働組合）

「日本は住みやすいか」という問いは、いま自分の中では「いつまで日本にいられるのだろうか」という問いに変換される。これは、筆者を含む在日朝鮮・韓国人であれば、多くの人が昔から感じてきたものだろう。しかし近年になって、より現実味を帯びて迫ってくるようになった（そんなことを口にしただけで、「嫌なら出ていけ」という言葉がどこからともなく聞こえてくる）。

これは被害妄想だろうか？ しかし、路上で堂々と「朝鮮人は死ね！ 殺せ！」「在日特権を剥奪せよ」とヘイトスピーチを叫びデマを扇動する姿を目にすると、どうしたってそんな気分になる。これが差別でなく、言葉の暴力でないならば、いったい何だというのだろう。

現在、在特会（在日特権を許さない市民の会）をはじめとする極右団体による路上での醜悪な行動は、いわゆる「カウンター」運動の活発化により、最盛期に比べれば沈静化しつつある。

しかし、「言葉の暴力」が沈静化したのかとい

うと、決してそうではない。暴力はすでにいたるところに浸透し、日常化している。たとえば、ツイッターを眺めていたら、こんなものを見かけた。

「昨日の成田空港大型書店。少しはマシになったかと思ったら、反中国反韓国本はやっぱり大量にあった。海外観光客も寄る国際空港書店は少々自粛するべきではないのか。」

(<https://twitter.com/gaby6100/status/556324154782146561>)

棚の写真も掲載されている。そこには『中国・韓国を本気で見捨て始めた世界』『仲良く自滅する中国・韓国』『日本に敗れ世界から排除される中国』『かわいそうな歴史の国の中国人』といったタイトルの出版物がずらっと面陳されていた。ツイートにもある通り、日本に降り立った海外の人たちが見たら、なんと思うだろうか。

これも暴力の一つであるならば、メディアにも責任の一端があるはずだ。棚作りは最終的には書店員の責任なのだろうが、あのようなタイトルの

書名を大量に流通させているのは他でもない、出版社だからだ。雑誌やTVなども同様であろう。

差別と暴力が蔓延する社会が「住みやすい」はずはない。よって、それをいかに規制するかが問題となってくる。だが、この議論になると、どうしても「表現の自由」をめぐる「踏み絵」に陥ってしまいがちという印象がぬぐえない。ヘイトスピーチ規制は表現の自由を損なう、と。そこで議論がストップしてしまうのだ。

たしかに乱暴な規制が実現してしまえば、批判的言論活動を制限してしまうことにもなる。この点は、良心的なメディアにとって譲れない重要な点である。そのことへの危機感が必要だ。

しかし、現に暴力がまかり通っている以上、議論がそこでストップしてはならないのではないだろうか。ストップしていること自体が、マイノリティに対して「マジョリティは何もするつもりがない」という負のメッセージを届けてしまうからだ。問題は、表現の自由を堅持しつつ、その一方で、いかに暴力に対抗するか、ということのはず。

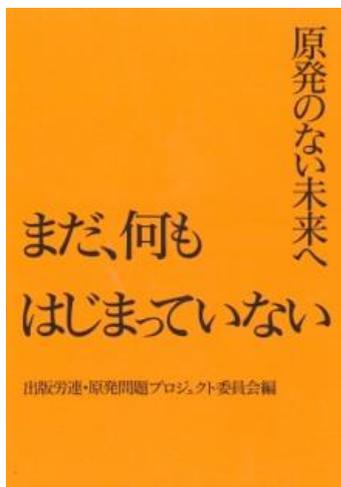
そのための議論は、すでに始まっている。

弁護士の神原元氏は、「『表現の自由』は、現代社会では、むしろこれを『国民が正しい情報を得る権利』と構成するべきである」と述べる。そしてメディアはその責任を負う、と。

また、そのための手段は対抗言論に限らない。社会学者の明戸隆浩氏は、「『人種差別の扇動』としてのヘイトスピーチを規制する上では、その前提として『何が人種差別であるか』ということについての社会的な認識の蓄積が不可欠」と指摘し、現代日本においてまずは、表現規制の含まれない人種差別禁止法こそが必要と説く。

暴力と差別への対抗を、「表現の自由かヘイトスピーチ規制か」という二者択一的な問題設定に限定しない。そうすることで、出版の現場で一人ひとりにできることも見つかるに違いない。

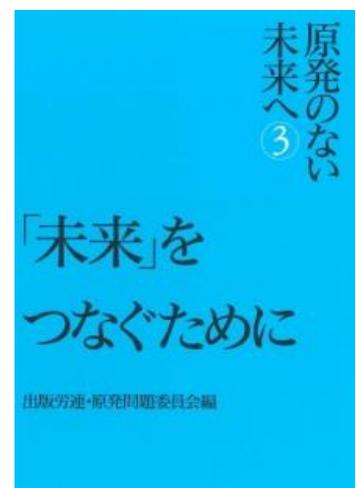
なお、神原・明戸両氏の発言は、ヘイトスピーチと排外主義に加担しない出版関係者の会編『NO ヘイト！ 出版の製造者責任を考える』（ころから）から引用した。ぜひ一読してほしい。



1号
2012年7月13日発行



2号
2013年5月14日発行
特集：柳町秀一「原発の根本問題に答える」
必見：原発関連年表



3号
2014年7月10日発行



なめらかだけれど息苦しい コミュニケーション

高橋 秀匡 (実教出版労働組合)

今回のテーマ「日本は住みやすいか？」について、いろいろと考えてみました。例えば、子どもを保育所に預けたいけれど、保育所は不足している。この点からは「日本は住みにくい」のかもしれませんが。しかし一方で、日本は治安が良く、安全であり、清潔である。これらの情報を考慮すると、逆に「日本は住みやすい」のかもしれませんが。残念ながら、私個人は結婚も子育てもしていないため、生活者としての自覚があまりなく、上述の観点から判断することはなかなかできません。ですから、「日本は住みやすいか？」といった問いを「日本は生きやすいか？」と強引に変えて意見を述べてみたいと思います。

企業に勤めて3年が経とうとしている私が、現時点で思いめぐらし気づいたのは、「コミュニケーション」によって「生きやすさ」が測れるかもしれないということです。コミュニケーションは暗黙のルールに則るものです。空間や時間を規定し、限りのない連鎖をつくる。それもできる限りスムーズに。では、日本におけるコミュニケーションで私が感じている特異なルールとは何かを具体的に述べていきたいと思います。

まず、日本では基本的に謙遜しなければコミュニケーションが成立しないような気がします。どこにいても「こんな私が」と前置きし、「申し訳ないのですが」と謝らなければなりません。文章が稚拙であるこんな私が、数多くの人目に留まるこのような場でそうするのはまだわかります。しかし、大学教授や批評家といった、その道についての専門家でさえ、腰を低くして自分の説明をしなければならぬような状況があります。もちろん、それが日本人らしい礼儀正しさにつながることはあると思いますが…。

また、コミュニケーションのなかで自分のパートナー（配偶者や恋人）について語る時に、ネガティブな面やエピソードをあげる人が多いように思います。恋愛（性愛）という「熱病」から覚めることは当たり前だと思いますが、だからといって相手を大切にしない、尊敬できないという

こととは別ではないでしょうか。もちろんパートナーとの関係性は個人の問題ではあるのですが…。しかし、これも結局「実際の関係性がどうであれ、とりあえず自分のパートナーについてネガティブに語っておこう」というルールに則っているのではないかと思います。（一方で、自分の偶像について雄弁に語るコミュニケーションは非常に豊かであるような気がします。）

これまで述べてきた点をふまえると、日本は少々ルールブックが分厚いような気がします。特に個人を表現することに多くの制約を設け、その場がいかにもうまくおさまリ、円滑に進むかを第一義とする。そのことこそが是であり、よって「発信者」や「宛名」はあまり重要ではない。誰が「発信者」であるか、誰が「宛名」かは入れ替え可能であり、端的に、淀みのない流れが自己目的化しているように感じます。先ほどのパートナーについて語ることは、「ネガティブに語る」というルールに則ることで、恋愛（または家庭をもつ）といった、個人の感情や経験の生々しさを漂白し、記号化させているといえるのではないのでしょうか。

このような、それぞれのメンバーが個をその場に浸透させ、役割を演じるコミュニケーションはとてなめらかです。しかし息苦しい。そもそも、かけがえのないコミュニケーションとはそのようなルールを考慮することから逃れ、自由であることから生まれるものだと思います。そこには、「発信者」や「宛名」の個性があり、そして多少のルールの逸脱も認められる。いや、ルールの逸脱こそが「発信者」や「宛名」の個性をより強く際立たせることができるような気がします。しかし、どのような場でもそのようなコミュニケーションを生み出す関係性がつくれるわけではありません。そのためには、様々なコミュニティに属することが重要であるような気がします。労働時間が長く、職場と家の行き来のみといった、戦後高度経済成長モデルのような生活では難しいのではないかと若輩者は思うのです。



「フツー」だと安心できる？

石塚 幸子（出版労連中央執行委員・大日本図書労働組合）

先日、知人が企画したイベントに参加しました。その名も「家族の形のダイバーシティ」、いわゆる「フツーの家族」とは異なる家庭の子どもたちの発言、それを受けての参加者の交流、そしてもっと家族の多様性を広げていこうということを皆で考える、というプログラムでした。個人的にとっても面白かったので、その紹介と共に、そのとき感じたことを書いてみたいと思います。

「フツーの家族」って何？ 両親がいて、血の繋がった子どもがいて、休日には家族で出かける、例えばファミリーカーのCMに出てくるような感じでしょうか。それに対し、このイベントでテーマになっていたのは、ひとり親や里親、同性婚カップルで子育て中の方なども参加しており、そうした家庭での話が報告されていました。そんななか、私が一番心に残ったのが「かわいそう問題」という話。例えば、シングルマザーで子育てしている家庭の子どもに対し「かわいそう」といった主旨の言葉が、周りの大人からかけられることがよくあると。そうしたとき、その子ども自身は、母子の関係に対して、特に大きな問題は感じていなかったとしても、そうした周囲の声で、自分のこの状況はかわいそうなんだ、自分は周りと違うんだと思わされてしまうのではないかと。また子どもが、養護施設の出身であること、片親であることなどを明らかにすると、周囲の目が気になるため、普通の家族であるかのように自分の家庭の話を装ってしてしまうという話など。要は、自分自身がどう思っているかとは関係なく、周囲から見て「かわいそう」かどうか、という世間の目の問題です。

確かに、今までの社会では、多くの家庭がいわゆる「フツーの家族」だったかもしれません。しかし現在、本当にそうした家族が大多数であり、定形としてあるべき家族像なのでしょうか。目指す姿としてはこうあるべきだ、という意見ももちろんあるかと思いますが。しかし私自身は、もっといろんな家族の形をありにした方が、家族の問題だけでなく、多くの人にとって生きやすくなるんじゃないかなと思っています。

例えば、進学や就職、結婚など、人の生き方にも、やはりある定形があり、そこから外れた人はかわいそう、と思われがちです。私はこれでいい、と思えるほどその人が強くあればいいのですが…。時には自分の気持ちに反しても、人から見てどう見られるかという部分に重点を置いてしまう場合もあるのではないのでしょうか。社会の中で大多数に属していたいし、そこから外れた人はかわいそうな人、自分とは違う人、時には非難する対象となってしまう場合もあります。自分自身がそちら側にいるときはそれで安心感を得られるのかもしれませんが、ひとたびその外に出せば…。一気に立場は逆転し、これまでそうした定形外を認めてなかったからこそ、そうってしまった自分が辛くなってしまう、ということも起こるのではないのでしょうか。

私自身のことで言えば、大学院を中退したとき、もう元のルールには戻れない、と真剣に悩みました。当時は、大学院を卒業して、いい企業に入って、という勝手に思い描いたルールがあり、それが唯一の人生の道だと信じていました。だからこそ、そこから外れてしまった自分はもうダメだと思ってしまったり。結果的にはそんなことはないし、なんとかなっているのですが。今以上に私も、世間の目を非常に気にして、そこでどう見られるかをとても重要なことと考えていました。もちろん今でも世間の目を気にするところもあるのですが、昔よりは和らいだかなと。

しかし、ひとたび社会に目を向けてみると、冒頭の家族の問題一つにしても、多様性を受け容れない社会という風潮はまだまだ強いなと感じています。そうした状況は変わるべきだし、変えていきたいと思っていますが、じゃあ自分に何ができるのかと。それほど大きなことはできないけれど、例えば自分が人とは違う部分を、もっと堂々と言ってもいいのかなと最近では思っています。人は皆違っているんだから、その違いをありにして、明らかにしていくだけでも少しは社会の雰囲気が変わるきっかけにならないかなと思っています。



きれ世代から見た日本

平田 太一（日本標準労働組合）

小学生の頃の日記にはこう書いてある。

「平成 5 年 8 月〇日。明日から塾の合宿。世の中は『バブルがほうかい』して『就職氷河期』だから勉強しないと。明日、先生に『ハチトウレンリツ』って何のことか聞いてみよう」

小学校入学と共に株価が下落。消費税が導入され、日本経済が転落を始めた。以降、「失われた 20 年」と言われるように、歳を重ねるごとに景気が悪くなっていった。政治も迷走を極める中で、将来への不安ばかりが募る時代に突入した。

中学生・高校生の頃の日記にはこう書いてある。

「平成 7 年 4 月×日。明日は中学の入学式。バスケットボール部にしようか、ブラスバンド部にしようかなやむ。ところで、世の中は『サリン』と『オウム』一色」

「平成 9 年 7 月〇日。期末テストが終わった。高校推薦のためには学年五位には入らないと。そういえば、『酒鬼薔薇聖斗』がようやくつかまったらしい。同級生だったとは」

「平成 12 年 6 月×日。高校最後の演奏会が終わった。燃えつき症候群気味だけど、大学受験に切り替えないと。そういえば、ネオ麦茶ってやつが『バスジャック事件』起こした。また同級生。受験になると何かと同級生が事件起こすな」

中学から高校にかけて日本経済は悪化の一途をたどる。経済成長率が 0%を下回り、銀行は破綻し、企業の倒産が相次いだ。年間の自殺者数も 3 万人を超え、以降減少していない。社会がますます混迷する中、衝撃的な事件を目の当たりにするようになった。とりわけ、「キレる 17 歳」が社会問題になるほど、同世代による凶悪犯罪が多発した。

大学生の頃の日記にはこう書いてある。

「平成 14 年 7 月〇日。学園祭の準備始動。内装にこだわったジャズ喫茶にしたいが、まだ就活が終わらない先輩が多く人手不足。『完全失業率』が過去

最高になったらしいが、今から就活が不安だ」

大学卒業後の日記にはこう書いてある。

「平成 20 年 6 月×日。一時金が出たので家族で会食。あれこれと悩んだ結果、懐石料理を楽しむ。それにしても、『秋葉原』に行かなくて本当によかった…。また同級生の犯行のようだ」

高校から大学にかけて「有効求人倍率」が 0.5 倍台まで落ち込む。働く気はあっても仕事が見つからない。正規雇用されない。失業者とフリーターが増加すると同時に「働きたくない若者＝ニートの急増」が社会問題化した。バブル崩壊以降、安定した職を得るためにと「有名大学」に入ることを求められてきたが、大学に入る頃には「有名大学」を出ても就職できない時代が到来。信じてきた価値観は崩壊した。

大学卒業後も、日本の平均給与は下がる一方。「リーマンショック」を境に 20 年前の水準まで落ち込んだ。また、非正規雇用が増加し、正社員としてフルタイムで働いてもギリギリの生活さえ維持が困難な状況を示した、「ワーキングプア」が社会問題となった。

成長するとともに日本経済が悪化し、社会の状況が激変してきた私たちの世代にとって、「がんばった＝報われる」という式は成立しない。その意味で「日本は住みにくい」と評価することもできるだろう。しかし、その状況を受け入れることでしか、私たちはこの国で生きていくことができないことも事実である。ならば、悲観していても仕方がない。自分にとって少しでも「住みやすい」と思える国を想像し、自分に何ができるかを考え、行動すること以外に、報われる道はないのではないだろうか。

「きれ世代」は、日本の未来を諦めて社会に「キレる」のではなく、新しい価値観で未来を切り拓く、「切れる世代」になっていくことが求められているのではないだろうか。



未来は誰のものか

吉村 かつら（日本文芸社労働組合）

長寿の家系に生まれた。いちばん早く逝った母方の祖父は 90 歳。曾祖母と母方の祖母は白寿のお祝いをしたし、父方の祖父母は 96 の年男、年女を経て、むこうへ逝った。だから自分の人生もある程度は長いんだろうな、と思いつつも、さすがにそろそろ折り返し地点だろうと考えるようになった。

会社でも、長い間「若手」だったが、いつの間にか「中堅」となり、このままでいくと「ベテラン」と呼ばれるようになるのだろう。年を取ればそれなりの役割を求められるようになる。経験を積んだなりの判断や、トラブルへの対応。その代わり、若い人には、フットワークの軽さやクリエイティブな発想、そしてときには物怖じしない無鉄砲さや冒険を期待する。

ただ、最近よく考えるのは「組織は誰のものか」ということだ。人事や人材育成はもちろん、企業のビジョンを年老いた経営者が決める、中長期の計画を定年前の管理職が決める、賃金や人事のシステムを任期の短い役員が決める。会社の重要事項を決めているのは高いポストにいる比較的年配の人たちだし、さまざまな理由から、多数決ではない決め方も往々にしてありそうだ。その組織が永續することを前提としているのに、将来を担う若年層の意見はなぜ反映されないのか。そんな不満を強く感じるようになった。

「組織は誰のものか」は「国は誰のものか」という問いでもある。住みやすい国も、働きやすい会社も、そこにいる人の考えや思いが反映されてこそ、実現するものだと思う。

給料が上がったとか、ベアが復活したとか、それはどこの話なんだろうと思ってしまう。報道も「一部の大企業を中心に」だ。株価が上がろうが、大企業が利益を上げようが、私たちの暮らしは豊かにはならないし、地方が寂れていくのにも一向に歯止めがかからない。先の総選挙だって 2017 年に必ず消費税を 10% に上げることに對して言質を取られたのにほかならない。政治は私たちのどこを見ているのだろう。日常のつまらない

人間関係や、些細なトラブルに心を痛めながら、それでも会社のため、家族のため、自分の将来のためにあくせく働いているのが、私たちなのに。

立場が違えば考え方が変わる。当たり前のことだけれど、1 億 2000 万人には 1 億 2000 万通りの人生がある。それをどうするか決めるのに今の立法府は適切なのだろうか。一般企業では定年を迎える人が国会では若手だったり、国民の半分は女性なのに女性議員の数は 1 割に満たなかったり。第一次産業に働く人や、年収が 200 万円の人意見は、どこへいってしまうのだろう。庶民感覚のない人ばかりが集まって、税金について論じる。円安や株高の恩恵にあずかる人がすべてではない。原発はいらないという声が大きくても再稼働される。いろんなことが一方的に決められていく、そんな不信感がぬぐえない。

住みやすさを追求するには、住みにくさを知らなければ。日々の暮らしに困ったことのないお坊ちゃまたちや、前時代的なおじいさま方に、自分の行く末を決められてもなあ、と思ってしまう。女性だからという理由で昇進したと思われるのも迷惑だし、育児や介護の法律さえ調べれば必要な休みがとれると思うのも勘違いだ。国会をお坊ちゃまたちの集団にしてしまったのには、私たちの責任も大きいだけれど、今の小選挙区制のままでは格差は広がるばかりだろう。

子どもの頃に比べて、確かにこの国は「豊か」になった。停電は日常茶飯事、断水だってときどきあった。おやつと言えば、ふかした芋や野菜で、駄菓子屋に 10 円玉を握りしめていくのが贅沢だった。ジャージの膝や靴下にはいつも接ぎが当たっていたものだ。でも、自分たちが貧しいなんて誰も思っていなかった。

「未来は誰のものか」。それは、未来を生きる若者たちのものだと思う。私たちには、ものがなくても満たされている時代があった。未来を選択するのが若い世代なら、彼らに古き良き時代を伝えるのもまた、私たちに課せられた役割なのかもしれない。

【書評】『悪魔の詩』(上・下)

サルマン・ラシュディ 著 五十嵐 一 訳 1990年2月、9月(絶版)
各2000円+税 発売 プロモーションズ・ジャンニ 発行 新泉社

1989年、イランの最高指導者ホメイニ師が同書の著者ラシュディ氏に「死刑宣告」を出したことから世界が騒然となり、日本でも翻訳者が惨殺される事件が起こった。

フィクションである。2人のイスラム教徒が飛行機事故に遭遇。機外で抱き合いながら落下しつつも奇跡的に助かる。その後の地上でのドタバタ生活がユーモラスに描かれる。奇想天外な物語である。当時の読後感は、なぜかカフカの『城』に近いものだった。

問題となったのは、空中落下していく中での夢中にイスラム教預言者ムハンマドを「冒瀆」する内容が含まれていることである。確かにそのような表現もあるが、小説で創造した主人公の白昼夢の中の話、いわば夢のまた夢の話(夢譚)である。夢の中の暗喩や遠まわしの表現すら許されず、ジハード(聖戦)の対象になるのだろうか。

日本の「風流夢譚」事件*を思い出す。

「死刑宣告」も、当時、核開発を密かに進めて

いたイラン指導部の陽動ではないかと思えるが、確証はない。「言論の自由 vs 宗教の尊厳」という図式で議論がどんどんと進展し、ラシュディ氏は逃避生活に入った。しかし、これだけ話題になった本であるにもかかわらず、日本でまともな評価を聞いたことがない。読みにくさもあるが、言論の自由とも宗教の尊厳ともおよそ縁遠いわが国からすれば、どこかよそよそしい、意味不明な出来事と映ったのかもしれない。

それから四半世紀、再び「言論の自由 vs 宗教の尊厳」という図式で議論が起こっている。「悪魔の詩」事件は、過去の出来事ではない。死刑宣告の「効力」は依然続いており、ラシュディ氏はいまだに潜伏生活を余儀なくされている。現在の欧米では発行が難しいとされる。しかし、言論・出版・表現の自由、いや夢想する自由のために、今こそ必要とされる本である。(内田 浩)

*作中の夢の中で皇室批判やパロディが描かれた。右翼により中央公論社社長宅襲撃事件が起こる。

✿ 編集後記 ✿

「日本は住みやすいか?」という問いかけに、反語的な気分があったのは事実です。しかしそれよりも強く念頭にあったのは、いわば「祖型」のようなものを確かめてみたいということでした。

というのは、この数年、あらゆるものが急激に変わろうとしているように感じるのですが、それが望ましい方へ向かっているのかどうかを見定めるには、そしてその判断に確信を持つためには、一切の権威を取り払って自分の目で見、それに基づいて考えるほかないと思ったからです。

それには、これもすでに古人が繰り返し指摘していることですが、子どもが大人に問いかけるようにして、借り物ではない自分の言葉を磨いていくしかありません。今号が、そのためのささやかなヒントとなることを願っています。

今号より「原発のない未来へ」を再編、新たに「mi·ra·i·e」として出発します。通称「未来へ」と表記することにします。ご感想をお寄せいただければ幸甚に存じます。(湯原法史)

福島発リレーエッセイ『被災と向き合う日常から』⑩

生命の尊さ

庄司 郁子 (福島県田村郡三春町在住)

宇宙の激動の中で奇跡的に生まれた地球、そしてかけがえのない生命の誕生という奇跡。我が家の3人の子もたちが生まれるとき、生命の神秘に触れる体験をさせてもらった。

誰も、生命を脅かされず、安心して暮らせる安全な社会を願っているはず。

だがどんなに一生懸命、愛する家族や地域を大切にしている、戦争や原発事故が起きれば一瞬にしてそれらは奪われてしまう。だから、幼かった子どもたちと福島県へ来たときから、細々とだが、戦争や原発について学び、反対し、少なからず行動してきた。

そして 2010 年 9 月には福島第一原発正門前で、プルサーマル反対の全国からの声明文を読み上げていた。しかし翌年 3 月 11 日、未曾有の原発事故は起きてしまった。無力感に襲われた。

原発事故は、生命を育むことに一番近いところで懸命に働いている、第一次産業の人たちに最も大きな打撃を与えた。土壌、海や川、山や牧草が汚染され、農業（特に有機農業）、林業、水産業、酪農を生業としている人たちはあまりにも大きな犠牲を強いられ、その苦悩と奮闘努力は、4 年になろうとしている今も続いているが、十分な補償もされていない。

原発被災者は大変な犠牲を強いられているが、今回の事故によって経済最優先の考えが問い直され、子どもたちの未来のために、生命が大切にされ、持続可能な社会を作る方向への転換がなされたのならまだ良い。しかし全く変わっていない。

この世界には、懸命に生命を守ろう、つなごうと思って、行動している人たちのそばに、あまりにも生命を軽視している人たちがいる現実がある。

我が家の次女はアトピー性皮膚炎など 5 つの病気を持っているため、幼い頃から食や化学物質など環境に配慮してきたが、庭のハーブや家庭菜園のささやかな収穫の喜びも、育てた安全な野菜を食する喜びも奪われてしまった。（当初、 $1.2\mu\text{Sv/h}$ あった庭の土の線量は半減したが、除染は来年になるという。）

そしてその大切な世界の食は、巨大多国籍企業モンサント社——健康や環境に悪影響が指摘されている遺伝子組み換え作物市場の 90%をしめるという——に支配されると懸念され、その、政、官、財、研究機関、マスコミを抱え込み、反対派を押さえ込む手法は、原子カムラと同じだと指摘されている。そこにあるのは、安全性より利益の追求、情報操作そして隠蔽体質である。

それは、放射性廃棄物の問題も、地震や火山の噴火や避難計画の問題もクリアしないまま再稼働や原発輸出に踏み切ったり、秘密保護法制定や集団的自衛権を閣議決定したり、辺野古基地建設を強行する今の安倍政権のやり方にもある。唾然としてしまう。

私たちはこういう生命や人権を軽視するやりかたを認めてはならない。多くの人々に知らせ、あきらめることなく、撤回を求めることを声を大にして言い続けよう！

国の政策・方針、自治体のやり方に疑問や憤りを感じることの多い日々だが、この未曾有の原発事故を体験した者の責務として、子どもたちに希望の持てる未来を残したい思いで、できることを行動し続けたい。この原発事故により、さまざまな苦悩や悲しみを十分すぎるほど味わっている私たちが、多くの人とつながりあって、「原発はいらない」と声を上げ続け、生命を守るための提言をしていこう。

